

視点2

保育者にとっての「自然体験」の意味

室田洋子

(大学教員)

保育の感性 (sensitivity) を開く

保育者が「ほんとうに」驚き、発見し、感動すること。本物を体験し、子どものように夢中になり、びっくりし、探索し、知りたいと思う経験をする。それは日常の保育活動に強い刺激を与えるものと考えます。保育者自身が本物の自然体験をすることの意味はここにあります。子どものように心を躍らせる経験をする、机上の知識ではない、日常の経験を超えた体験があふれるほどにある場が自然体験の真髄です。

ホントの体験

保育の場で食育を行うと、子どもたちは、「ままごことではない、ホントの体験」に生きると反応します。クッキングの保育、園庭の野菜作り、自分で選択できるバイキング式の食事、散歩途中に見つける「食べられる、役に立つ」植物探しの時に見せる姿です。生き生きとした「一人前の」「役に立つ自分」(self-esteem efficacy)を示す姿です。子どもたちの誇らかな自尊心の源となる体験です。子どもたちの好奇心や興味は日常の気付き

室田洋子 (むろたようこ)
聖徳大学児童学部児童学科前教授。聖徳大学児童学部児童学科・聖徳大学大学院児童学研究科・聖徳大学大学院人間栄養学研究科兼任講師。

や自然体験の中に多く存在します。この気付き (sensitivity) や好奇心に波長を合わせ、問いに答えることができるか、これは保育の場で問われる重要な力量です。保育者本人の生の感動体験が重要であると考える理由です (残念ながら現在の幼稚園教諭・保育士養成の課程にはこれらのカリキュラムはありません)。知識や情報ではなく、生の体験です。

八ヶ岳山麓二七〇ヘクタールの森と牧場と農場の地で平成二六年夏より開始した保育者のための自然体験合宿は、このような意図によるものです (ここでいう保育者とは、幼稚園教諭・保育士・栄養士・看護師・協力者など、乳幼児にかかわる仕事をするすべての人を指します)。

実際の様子をのぞいてみましょう

長靴を履いて出る広い農場の中、もぎ取ったトマトをその場でかじる。この新鮮な味は

食べてみないとわからない。

わき出る泉、幅五十センチほどの小川が始まっていく。両側にはクレソンの群生。「クレソンよ」「コンフリーよ」「食べられるのよ」と言われなければ気付かない都会育ちの現実。鶏の卵集め。堆積し、ぬかるむ糞ふんを踏みしめる慎重さ。卵はこんなにも温かいものなのか。落とさないように気をつけて、足の周りに寄ってくる鶏たちに卵の礼をつぶやく。

牛舎は清潔。子牛の眼の何と愛くるしいことか。人を見ると鼻を寄せてくる。母牛の張り詰めた乳房は頼もしい。手を添えて搾るバケツに勢いよく乳が集まる。

畑の雑草取りには誰もが夢中になる。もう少し、もう一握りの雑草を取りたい。荒地地の雑草とは違い、耕された良い土地の雑草は、人にも「退治する楽しさ」を与える。雑草と呼んでは申し訳ない。スベリヒユ、高血圧の人に役立つ大事な葉草だそう。葉は広がっ

ているが抜きやすい。雑草にもそれぞれ名前がある。用途もある。

ハーブの畑に歩いて移れば、何十種類もの本物の「役に立つ雑草」が繁茂している。藍の葉で子どもたちと藍染め遊びをしようか。ミントの群生は美しい。切り取ったルバーブの茎をかじる。酸っぱい。これがジャム作りには欠かせない要素。小さな包丁を使える四歳児のクッキングにはちょうどよい。後で、採れ立て販売所でルバーブの束を購入しよう。機会を外せば来期までは手に入らないもの。販売所の横の斜面にはリンゴの木に実がなっている。完熟したリンゴは草の上に自分で降りる。店で買うリンゴとは大違い。パキッと割れて新鮮そのもの。

畑でニンジンを抜く。ダイコンも抜く。ジャガイモを掘る。どの作業も人を夢中にする。ものすごくおいしそうなニンジンの葉。太いニンジン、ダイコン。土を払ってその場をか

じりたい。時々足を組んだ格好をしたニンジンにも出会う。これ、保育室に置けば子どもたちは笑うだろう。本物に触れ、収穫する活動。際限なく働きたくなるのが農場の畑。子どもの遊びの感覚と同じ。

自然体験を口で確認（食育）

搾ったばかりの牛乳からカッターチーズを作る。温めた牛乳にレモン汁を加えて濾す。手間はいらぬ、バター作りには根気がいる。ペットボトルの牛乳を振り続けなければならぬから。ボトルの壁面にバターが分離し始めるとうれしくなる。

マヨネーズは先刻鶏舎で集めた生温かい卵を使う。卵がこんなにもサラダオイルを飲み込むものかを実感する。

バターもマヨネーズも自分で作ってから使用するもの。都会育ちの、ピアノの上手な保育者にはこのような発想はなかった。

自分が畑で収穫したジャガイモ、ニンジン、ダイコン、キュウリ、ズッキーニ、セロリ、トマト……を生で、ゆでて、炒めて、出来立てチーズと和えて、食べる。朝には初対面だった人と人が心を開く。もっと知りたい、知恵を、知識を、工夫を得たい。

まだまだあります……。

森に入ればキノコが、草原に出れば一斉に咲き始めた花々が目を留めてほしいと言わんばかりに背伸びをしています。彼らの名前を知りたい。彼らは役に立つの？ 食べられるの？ 毒があるの？

森から農場に入る時は「柵をキッチンと閉めること」。——なぜ？ 夜中に鹿が入ってきて野菜を食べてしまうから。

「キッチンと閉める」「手を洗う」「靴は靴置き場へ」は子どもたちが園で身に付ける大切な作法・習慣。ここでは農場の産物を守る必須の作法。自然との、野生生物との知恵比べ。

絵本の世界ではない、現実的な生活処理能力が欠かせない。

このように、本物の自然体験の中で、保育者は子どものように好奇心のまなざしを光らせ、注意深くなります。そして感動する心も開かれていきます。保育者に新鮮な驚きの心をもたらす具体的な体験が、ここでの自然体験にはあるのです。

子どものまなざしと感動を即座に感じる力を持つ保育者の力量に深い影響を与える体験です。保育者自らの自然体験活動に含まれる重要な意味がここにあると考えます。

*室田先生から自然体験合宿に関するインフォメーションがあります。本誌P 63の「子ども学ひろば」をご覧ください。